

使徒言行録2章1～11節

イエス様が復活されてから49日目に、つまり今朝、突然に聖霊が降って弟子たちが人が変わったように悲しみから解放されて、色んな国の言葉で神様の偉大な働きについて語りだしたのです。弟子たちが外国語で話し出したということは当時のガリラヤの置かれた状況からそれほど驚くことではありませんでした。しかし、彼らが差別されていたガリラヤ人であることが明らかになることに繋がる外国語を話し始めたことは人々にとっても大きな驚きでした。

今朝は2:2の「突然」という単語に注目しましょう。漢字では「突然」と書き、「然を突く」と書きます。「然」とは元々「犬の肉を焼く」という意味だったのですが、是認するという意味になりました。「然り」「当然」と使われるように常識としてある状態を言い表す意味になりました。それを突くのが突然です。「突く」は穴から犬が飛び出して来るという意味だそうですが、思いがけず、予期せぬ方向からという意味だそうです。それがペンテコステの出来事でした。

井村清和さんの「あたりまえ」という詩があります。当たり前のことと思っていたことが素晴らしいことだと気づかされるのは、当たり前が断ち切られた時です。それは苦痛の時であり、突然の時です。然りの日常が突かれて穴が開いて、そこから思いがけないものが飛び出てきて、なんとかはやく穴を塞いで、元の然りの世界に戻さないことには大変なことになると思う時です。しかし、穴が開いた時は、穴が開いている時にしか見えないものが見えたり、気が付かないものに気付かされる時です。神様は、悲しいことだけではなく、喜ばしいことも含めて私達が計画し、積み上げて行こうとする然りの世界を破ることによってご自身の求めておられることを我々に示そうとされるのではないのでしょうか。

ペンテコステの出来事で弟子たちの上に「舌」のようなものが現れ、一人一人が他国の言葉で話し始めたことも然りが破られたことです。そんなことは自然の世界でも、当然の世界でも、必然の世界でも起こり得ないことです。しかし、そういう「然」が破られ彼らが語りだした。これは単に不思議なことではなく、神様が私達の「然」を破ってすべての人間に求めておられる対話を重ねて共に生きることです。文化や習慣が違ってすべての人間が隣人として互いに人を受け入れ合い、平和に共存することです。ロシアのウクライナ侵攻の中で迎えた今年のペンテコステは、もっと他国の歴史と言葉を学んで神様が与えてくださった地球という生命共同体を守ることに目覚めるよう促しています。